# 教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 共通教育部　　資格： 准教授　　氏名： G．C．　デニソン

| 研究分野 | 研究内容のキーワード |
|---|---|
| Applied Linguistics（応用言語学），Second Language Development and Acquisition（第二言語習得），Language Assessment and Measurement（言語評価・測定），Vocabulary（語彙），Writing（ライティング） | EFL Writing, EFL Vocabulary Learning and Instruction, Many-Facet Rasch Measurement, Language Development, Language Assessment |
| **学位** | **最終学歴** |
| 博士（PhD in Education, Concentration in Applied Linguistics），修士（MSEd in TESOL），理学士（BS in Computer Science & Japanese Language and Culture） | テンプル大学大学院　教育学研究科　応用言語学専攻　博士課程修了 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 1.ペース読書 | 2024年4月～現在 | 情報英語科目で実施。この活動では、学生は自然なスピードで話される英語を聞きながら、トランスクリプトを読む。学生は、意図的に書き加えられた変更や間違いに気づくことができるように、リスニングに遅れないように速いペースで読まなければならない。この活動は、速いスピードで読み、また注意深く聞く力を養うのに役立つ。 |
| 2.英作文の添削フィードバックの方法の改善 | 2022年4月～現在 | 英作文の添削フィードバックを提供する方法を改善することに努めた。学生が授業以外の時間に課題に対するコメントやフィードバックを受け、その後、授業中に直接コンサルテーションを行い、ライティングの改善を図るという持続可能なフィードバックシステムへ移行しました。 このアプローチにより、学生はより自立し、内省的にライティングを行うことができるようになったと思っています。 |
| 3.反転授業の導入 | 2022年4月～現在 | 「Global IssuesⅠ」と「Global IssuesⅡ」の教材を一新し、学生が授業前にディスカッションの準備をすることで、授業中にトピックに集中する時間を増やす反転授業方式を導入しました。この新しい形式は、学生がポジティブに受けたと感じた。 |
| 4.個人別外国語学習プラン | 2021年4月～現在 | 学び発見ゼミにおいて実施した。授業では、さまざまな外国語学習活動やツールやリソースを紹介する。そして、学生がその良い点、悪い点についてクラスメートとディスカッションをし、ワークシートを記入しながらそれぞれの有用性について考える。授業が進むにつれ、学生が最も有用なものを選択し、自分自身の外国語学習プランを計画する。最後に、その計画をクラスで発表する。学生にとって、そのプランが本学での外国語学習の指針となる。 |
| 5.チャレンジコースのオンライン英語合宿 | 2021年2月16日 | COVIDの流行により、英語チャレンジコースの英語合宿を対面で開催できなかったが、オンラインでさまざまな英語活動を行うことができた。グループディスカッションやディベートを通じて、途上国での問題や、そこに住む人々を助ける方法について学生が考えた。学生が積極的に自ら問題を考え、kiva.orgを使って助けを必要としている人たちを支援することができた。 |
| 6.遠隔授業でのアクティブラーニング | 2020年4月～現在 | 外国語の授業では、学習と指導の中でコミュニケーションとディスカッションが最も重要だと言える。そのため、遠隔の環境でもアクティブな議論や意見交換を行う方法を見つける必要があった。グーグルの クラスルーム、チャット、ミートおよびマイクロソフトのフリップグリッドを組み合わせて活用し、学生がトピックについて話し合い、積極的に意見交換ができる環境を再現することができた。特に意見交換をフリップグリッドでするのが学生たちに好評だった。 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 7.チャレンジコースの英語合宿 | 2020年2月17日～2020年2月18日 | 英語チャレンジコースの学生のための２日間の英語合宿を中央キャンパスにおいて実施した。OG、現役、新入メンバーが参加し、語彙学習や実用的な会話力を中心にアクティブな研修となった。参加したメンバーの英語能力を向上させることだけではなく、ディスカッションしながら、kiva.orgを使い、途上国で融資を必要とする借り手を自ら選択ことなどを通じて、途上国支援の実際を経験した。国際理解や、途上国への興味を高める機会になったと考えられる。メンバーの間の「縦と横の絆」を強まる機会ともなった。（参加人数１３名） |
| 8.ピアアセスメント（相互評価） | 2019年4月～現在 | 英語ライティング科目で実施。学生がるルーブリックを使い、お互いに評価をする活動を積極的に導入した。学生が相手のライティングを向上させることだけではなく、自らの英語能力の成長を促すことにもつながったと考えられる。 |
| 9.チャレンジコースの英語合宿 | 2019年2月12日～2019年2月13日 | 英語チャレンジコースの学生のための一泊二日の英語合宿を丹嶺研修センターにおいて実施した。OG、現役、新入メンバーが参加し、語彙学習や実用的な会話力を中心にアクティブな研修となった。参加したメンバーの英語能力を向上させることだけではなく、メンバーの間の「縦と横の絆」を強まる機会となった。（参加人数１０名） |
| 10.ICTを使った自主的な語彙学習の導入（Class Vocabulary Lists） | 2018年4月～現在 | 共通教育の英語チャレンジコースで実施。Google Classroomを使い、学生が自分にとって一番大事だと感じる語彙を共有シートで記入し、授業でその語彙を使った活動を行なう。自主学習活動の一つとして学生が選んだ語彙から講師がクイズを作成し平常点に入れることになっている。 |
| 11.ルーブリックの導入 | 2017年4月～現在 | プレゼンテーション科目で実施。プレゼンテーションの授業にルーブリック評価を導入し、学生をグループ化しルーブリックを使いながら自分達のプレゼンテーションを一緒に考え、プレゼンテーション能力や英語能力の向上につながったと考えられる。 |
| 12.スピーキング・テストの導入 | 2017年4月～現在 | スピーキング・リスニングが中心となる科目で実施。Transfer Appropriate Processing（TAP）の研究に基づいて筆記試験をより一層適切なスピーキング・テストの形に改善することができた。 |
| 13.グループ・プレゼンテーションの導入 | 2016年4月～現在 | 英語プレゼンテーションの科目や情報英語の科目で実施。共同学習を通してグループ・プレゼンテーションを取り入れたプロジェクトを実施した。 |
| 14.授業におけるフォーカス・オン・フォーム法とインタラクション重視のアプローチの両立 | 2016年4月～現在 | インタラクション（関わり合い）を英語学習の中心に置くため、授業においてもペアワーク、グループワーク、共同学習を多く取り入れた。同時に、このようなコミュニケーション重視の教授法は明示的な文法説明で支えられるべきであるという方針のもと、有用で実用的な文法説明を、それがコミュニケーション活動に必要になった時点で提供するというアプローチを採用した（逆向フォーカス・オン・フォーム法）。その結果、スピーキングおよびライティングにおける表現の誤りの減少につながった。 |
| 15.チャット・ルームの設立 | 2014年4月～2016年3月 | 英語学習のあらゆる面でサポートを提供する「チャット・ルーム」の設立に携わった。生徒は会話や面接練習から文法説明まで、様々なニーズを持って自由にチャット・ルームを訪れ、学習意欲の向上につながったと考えられる。 |
| 16.多書（Extensive Writing）の推進 | 2013年4月～2016年3月 | ライティング能力を向上させるためにエクステンシブ・ライティングを積極的に授業に取り入れた。沢山書いてアウトプットすることにより、Words Per Minute（毎分語）の向上や長文がかけるようになるな |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 教育方法の実践例 | | |
| 17.授業外活動としての多読（Extensive Reading）の推進 | 2012年9月～2016年3月 | どの様子が見られた。<br>機会があるごとに多読教材に取り組むよう、生徒に指導した。適切な内容を持った質の高いインプットを大量に提供することにより、読解能力の向上が見られた。 |
| 2 作成した教科書、教材 | | |
| 1.A shorter course in English for business meetings: Discussion（南雲堂） | 2023年1月15日 | Kazunari Tsuji, Hiroaki Miyake, G. Clint Denison, & Seto Tsuji.　企業やNGO・NPOなどの団体が開催する対外会議・社内会議においてもとめられる「会議英語力」を身につけることが本書の目標です。国際理解と国際協力を促進する大切さが問われる現在、様々なシチュエーション・ビジネスを念頭に、ディスカッションで求められる英文（内容、語彙）を効果的に習得できます。「専門用語」を含む文例とその解説を通して、ビジネスに関する知識を深めることも可能です。 |
| 2.A shorter course in English for business meetings: Presentation（南雲堂） | 2023年1月15日 | Kazunari Tsuji, Kenji Hosono, G. Clint Denison, & Seto Tsuji.　本書は、様々なビジネスを念頭にプレゼンテーションで求められる英文（内容、語彙）を効果的に習得できるよう通訳訓練を取り入れるなどの工夫がされています。また、各種業界の会議で使用される「専門用語」を含む文例とその解説を通して、ビジネスに関する知識を深めることができます。 |
| 3.Discussion Roles（役割）の教材 | 2019年4月 | 英語チャレンジコースのGlobal Communication Ⅰ・Ⅱのために作成。グループ・ディスカッションがスムーズに進行させるように、学生の役割を決め、4種類のワークシート（Leader, Summarizer, Connector, Language Monitor)をディスカッションの準備や実施に使用した。ディスカッションごとに学生の役割が変わり、様々なディスカッション・スキールを練習する機会となった。 |
| 4.Discussion Leader（ディスカッション・リーダ)の教材 | 2019年4月 | 英語コミュニケーションⅣの授業のために作成。学生がディスカッショングループのリーダができるように独特な教材を作成した。それを使って学生が自らニュースの記事を選び、調査した上でディスカッション・クエスチョンや語彙の質問を作りグループ・ディスカッションを行った。英語能力や社会問題への興味を高める機会となった。 |
| 5.Kiva.org in the classroom | 2019年2月 | Kiva Microfunds （インターネットを介してマイクロファイナンスを行うNPO機関）を授業で用いるため独特な教材をを作成し、その教材を使い、学生が途上国で融資を必要とする借り手をグループで選択し、融資までのプロセスを体験できる。 |
| 6.デジタルリテラシーの教材の活用 | 2018年9月 | ICT for Everyday Lifeの授業を中心におって、英語を通してパソコンやインターネットの安全で効率的な使い方（デジタルリテラシー）を上達させるために自作のデジタル教材を導入した。強力なパスワードの作り方や、海外旅行の計画の立てるために海外のホームページの安全な使い方、様々な面で学生をデジタルリテラシーについて考えさせる機会となった。 |
| 7.コンピューター利用語学学習(CALL)の活用 | 2016年4月 | 語彙学習をより一層効率的にできるようにGoogle DocsやGoogle　Sheetsを活用した。学生が参加し、自分たちが重要であると思う単語を選び、自分たちのためのリストを作成した。その結果、語彙学習意欲の向上が見られた。 |
| 8.ディスカッションスキール　(Conversation Strategies)の教材の活用 | 2016年04月 | ディスカッション・スキルを向上させるために論議を授業において頻繁に取り入れ、自作のカードや参考書を使ってゲーム感覚でディスカッション・スキル（Conversation　Strategies)を活用した。その結果、会話能力の向上につながったと考えられる。 |

| 教育上の能力に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| | | |
| 4 その他 | | |
| 1.教員採用選考試験対策英語面接指導 | 2024年7月16日～2024年7月30日 | 2024年度にも教員採用試験を受ける学生のために英語面接の練習を行った。MUKOJO+MOREで実施した。 |
| 2.教員採用選考試験対策英語面接指導 | 2023年7月27日～2023年8月3日 | ２０２３年にも学校教育センターと連携して、教員採用試験を受ける学生のために英語面接の練習を行った。MUKOJO+MOREで実施した。 |
| 3.アメリカの文化を小学生に紹介 | 2022年11月22日 | 現在、小学校に勤務している本学の卒業生とコラボレーションすることが出来た。小学生にアメリカやその文化について教える授業を作成し、授業に導入した。反応が良くて、生徒にとって良い経験になったと思われる。 |
| 4.教員採用選考試験対策英語面接指導 | 2022年6月23日～2022年7月7日 | 学校教育センターと連携して、教員採用試験を受ける学生のために英語面接の練習を行った。学生たちからは面接で自信を持ち、能力を発揮することができたとの言葉があった。 |
| 5.オーストラリアに出発する前の準備講座 | 2019年12月12日 | 本大学の学生が春期英語留学に出発する前にオーストラリア文化や英会話の基礎やホームステイ先に役立つ情報につての講座を開いた。 |
| 6.留学生のための講義の通訳 | 2019年7月9日 | Study in Japan (SIJ)の留学プログラマにおって、韓国、アメリカ、オーストラリア、台湾からの留学生が書道の授業で、書道の先生が教えたことを通訳（和英）しながら学生に伝えた。異文化交流につながったと考えられる。 |
| 7.ＭＦＷＩに出発する前の準備講座 | 2019年7月2日 | 本大学の学生がMukogawa Fort Wright Instituteの夏期英語留学に出発する前にアメリカ文化や英会話の基礎につての講座を開いた。講座があって学生の留学生活がより一層スムーズにできたと考える。 |
| 8.「Successful Communication in Japan」の講義実施 | 2019年6月27日 | Study in Japan (SIJ)の留学プログラマにおって、韓国、アメリカ、オーストラリア、台湾からの留学生のために特別講義を実施した。留学生が特に悩む異文化のコミュニケーション問題について説明し、どうやってホストファミリーや地域の人達と上手くコミュニケーションが取れるように練習を行なった。学生の留学生活がよりスムーズにできたことにつながったと考えられる。 |
| 9.学生の海外でのプレゼンテーションの支援 | 2019年6月 | 英語チャレンジコースの学生が海外で英語の発表をすることになって、抄録とプレゼンテーションの原稿を向上させるために努力した。 |
| 10.留学生のための講義の通訳 | 2018年7月3日 | Study in Japan (SIJ)の留学プログラマにおって、アメリカとオーストラリアからの留学生が書道の授業で、書道の先生が教えたことを通訳（和英）して学生に伝えた。異文化交流につながったと考えられる。 |
| 11.「Successful Communication in Japan」の講義実施 | 2018年6月28日 | Study in Japan (SIJ)の留学プログラマにおって、アメリカとオーストラリアからの留学生のために特別講義を実施した。留学生が特に悩む異文化のコミュニケーション問題について説明し、どうやってホストファミリーや地域の人達と上手くコミュニケーションが取れるように練習を行なった。学生の留学生活がよりスムーズにできたことにつながったと考えられる。 |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 1 資格、免許 | | |
| 1.全日本柔道連盟公認柔道指導者C指導員認定 | 2013年4月1日～2016年3月31日 | |
| 2.International TEFL Teacher Training 認定 TEFL資格証書 | 2012年01月11日 | |
| 3.日本傳講道館柔道参段 | 2011年09月28日 | |
| 4.日本語能力試験（JLPT）Level N1（最高レベル） | 2011年01月30日 | |

| 職務上の実績に関する事項 | | |
|---|---|---|
| 事項 | 年月日 | 概要 |
| 2 特許等 | | |
| | | |
| 3 実務の経験を有する者についての特記事項 | | |
| 1.特定非営利活動法人「篠山国際理解センター」の国際理解教育 | 2009年4月～2016年3月 | 丹波篠山市民のための英会話教室や国際理解に関するコミュニティ活動を篠山国際理解センター（International Center of Understanding）において行なった。 |
| 2.特定非営利活動法人「篠山国際理解センター」の翻訳 | 2009年4月～2016年3月 | 和英・英和翻訳（観光パンフレット、外国人のための市民ガイドブックなど）を篠山国際理解センター（International Center of Understanding）において行なった。 |
| 4 その他 | | |
| 1.JALT Vocabulary SIG Grant Reviewer | 2022年4月～現在 | JALT Vocabulary SIGの助成金担当責任者から依頼を受け、助成金申請の査読を担当した。 |
| 2.Vocabulary Learning and Instruction (VLI): Reviewer 論文査読者 | 2020年2月～現在 | 国際学術誌 Vocabulary Learning and Instruction (VLI) から依頼を受け、外国語の語彙学習や語彙教育に関する論文の査読を行った。 |
| 3.Vocabulary Learning and Instruction (VLI): Proofreader 校正者 | 2020年2月～現在 | |
| 4.国際センターでの翻訳サポート | 2018年4月～現在 | 国際センターの職務上での書類、手紙、大学のホームページの内容などの翻訳や校正などを努力し続けている。 |
| 5.Journal of Extensive Reading (JER): Reviewer 論文査読者 | 2017年11月～現在 | 学術誌 Journal of Extensive Reading (JER) から依頼を受け、多読（ER）における外国語の語彙学習や語彙教育に関する論文の査読を行った。 |
| 6.Extensive Reading in Japan (ERJ): Proofreader 校正者 | 2016年6月～2021年3月 | |
| 7.Extensive Reading in Japan (ERJ): Column Editor コラム編集者 | 2016年6月2019年10月 | Extensive Reading in Japanのコラム「Recent Research in Extensive Reading and Listening」のコラムを維持し、エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連する最新の研究をまとめています。 |
| 8.Vocabulary Education and Research Bulletin (VERB): Proofreader 校正者 | 2015年10月～現在 | |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 1 著書 | | | | |
| 1.A shorter course in English for business meetings: Presentation | 共 | 2023年1月15日 | 南雲堂 | Kazunari Tsuji, Kenji Hosono, G. Clint Denison, & Seto Tsuji.　本書は、様々なビジネスを念頭にプレゼンテーションで求められる英文（内容、語彙）を効果的に習得できるよう通訳訓練を取り入れるなどの工夫がされています。また、各種業界の会議で使用される「専門用語」を含む文例とその解説を通して、ビジネスに関する知識を深めることができます。 |
| 2.A shorter course in English for business meetings: Discussion | 共 | 2023年1月15日 | 南雲堂 | Kazunari Tsuji, Hiroaki Miyake, G. Clint Denison, & Seto Tsuji.　企業やNGO・NPOなどの団体が開催する対外会議・社内会議においてもとめられる「会議英語力」を身につけることが本書の目標です。国際理解と国際協力を促進する大切さが問われる現在、様々なシチュエーション・ビジネスを念頭に、ディスカッションで求められる英文（内容、語彙）を効果的に習得できます。「専門用語」を含む文例とその解説を通して、ビジネスに関する知識を深めることも可能です。 |
| 2 学位論文 | | | | |
| 1.The development of second language writing across the lexical and communicative dimensions of performance | 単 | 2024年8月 | テンプル大学博士論文 | 本研究では、日本の大学生290名の英語ライティングを語彙的・コミュニケーション的側面から分析した。語彙面では、複数語表現の使用が直線的に向上し、語彙の明瞭性は非線形的変化を示した。コミュニケーション面では、Comprehensibility(理解しやすさ)、Organization（構成)、Lexical Appropriateness（語彙の適切性)が向上し、Task Completion（課題達成)の向上は大学の文脈に依存した。語彙の多様性はContent（内容)やOrganizationと、複数語表現 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 2 学位論文 | | | | |
| | | | | の使用はComprehensibilityとLexical Appropriatenessと関連していた。さらに、語彙発達とコミュニケーション発達の間には正の関係があり、語彙の向上がコミュニケーション能力の成長を促進することが示唆された。 |
| 3 学術論文 | | | | |
| 1.Vocabulary learning using student-created class vocabulary lists（査読付） | 共 | 2020年8月 | Vocabulary Learning and Instruction, 9 (2), 1-8. | G. Clint Denison & Imogen Custance. この論文では、クラス用語彙リスト（CVLs)の教育的根拠と、グーグルシートを用いた実装について説明する。CVLの活用で学生は協力し、自分たちにとって重要だと感じる語彙の「ノートブック」を構築することができる。学生(N = 53)のCVL選択は、頻繁度に基づいた単語リスト(BNC /COCA、NGSL、TSL)と比較して、選択された語彙の有用性を調べた。なお、AntConc と AntCorGen を使用し、構築された情報技術キーワードリストを情報学 CVL と比較して、学生が自分の分野に適した語彙を選択しているかどうかを調べた。結果は、語彙を選択する自律性を学生に与えると、学生は一般的にしても自分の分野にしても有用性の高い単語を選択することで、CVLは有益な方法であり、頻繁度に基づいた単語リストを補完するにも役立つかもしれない。 |
| 2.Examining the lexical profile and speaking skills of English L2 learners（査読付） | 単 | 2019年03月 | 大阪女学院大学紀要、第15号、65-88. | 本研究ではディスカッションコースの一環として実施されたスピーキングテストでのEFL大学生の語彙プロファイルと定型的な文章の使用についてのパイロット調査を行った。このコースではディスカッションに適したアカデミックな語彙と定型的な文章の明示的な指導および練習を通じて学習者の生産的な語彙や全体的なスピーキングスキルを養成することを目的としていた。結果は英語能力がすでに高い学習者であってもNGSL 3とNAWLの語彙の使用率が増加し、全体的に洗練された語彙プロファイルになった。加えて、DornyeiとThurrell（1994）の提案に基づく定型的な文章の明示的な指導と練習が確認チェックの実行などの会話ストラテジーの増加につながったと考える。 |
| 3.Activities for developing suprasegmental skills in Japanese learners of English（査読付） | 単 | 2016年04月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 105, 165-187. | 英語の超分節的特徴は習得しにくいと言われているが集中的に練習することで向上させることができる。この論文では、超分節的特徴（スプラセグメンタル）を練習できる3つの活動について紹介する。一つ目はストレスとイントネーションに注目し、二つ目はリンキングに注目する。三つ目はポーズを使って考えをはっきり分けることを練習する。 |
| 4.Course materials for Communication English III（査読付） | 単 | 2016年04月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 104, 1-7. | この論文では、今までほとんど生産的な活動が行われてこなかったリーディングコースにおいて、ディスカッションを通してmeaning－focused inputとmeaning－focused outputを取り入れた活動を紹介している。その上、アカデミックな語彙をより一層効率的に学習できるための教材も紹介する。 |
| 5.A syllabus for the Practical English course（査読付） | 単 | 2015年10月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 102, 86-95. | この論文では、高校スーパーイングリッシュコースのプラクティカル・イングリッシュという授業のシラバスを提供する。このシラバスでは語彙学習に注目する一方で4技能フルエンシーに重点を置いている。シラバスの主な活動にはスピード・リーディング、スピード・ライティング、4/3/2スピーキング、単語テストなどが含まれている。 |
| 6.Conjunction-based sentence combining to develop complexity in fluent writing（査読付） | 単 | 2015年03月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 98, 63-75. | 外国語としての英語教育を数年間受けていても、複雑な文章が書けない学習者が多く存在し、さらに早く書こうとする際に短い文章や同じ文章を何度も繰り返すことで複雑な文章が書けていないという状況がある。この研究ではライティングの複雑性を増すセンテンス・コンバイニングという活動について調べた。高校1年のスーパーイングリッシュコース(N=53)の授業でセンテンス・コンバイニングの練習問題を順にやり、その結果対象者のライティングの複雑性（MLS、CPS）が上がった。その上、ライティングの速度（フルエンシー）にも微増が見られ、その研究結果やセンテンス・コンバイニングの練習問題について論じる。 |
| 7.Fluency development through extensive | 単 | 2014年10月 | Proceedings of the 16th Annual Temple | この論文では、中学校3年のスーパーイングリッシュコース(N=78)に取り組んだエクステンシブ・ライティング（多書）という活動について論じる。学生が自分のライティングの正確さに集中し過ぎ、長 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| 3 学術論文 | | | | |
| writing | | | University Japan Campus Applied Linguistics Colloquium, 53-59. | 文が書けないという問題は珍しくない。その問題が解決できるようにエクステンシブ・ライティングを授業に導入した。学生がトピックを選び、7分間できるだけ速く長く書き続け、終わったら自分のチャートに記録し流暢性（フルエンシー）を向上するように試みた。研究の結果として、学生のライティング速度が徐々に上がったのを見られた。その上、エクステンシブ・ライティングがライティング・フルエンシーの向上やライティングに対する取り組み易さの向上には効率的な活動の一つであるかもしれない。 |
| 8.Developing writing self-concept in the L2 classroom（査読付） | 単 | 2014年08月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 94, 17-21. | この論文では、セルフ・コンセプトという複雑な個人差の一つについて紹介する。なぜ、外国語の能力があるにも関わらず外国語に対する学習意欲がないというのはセルフ・コンセプトに基づいているかもしれない。学生のセルフ・コンセプトや学習意欲をどうやって向上させるかについて論じる。 |
| その他 | | | | |
| １．学会ゲストスピーカー | | | | |
| 1.Methodology, dissertation writing, and the IRB process | 単 | 2022年11月4日 | テンプル大学ジャパン、大阪キャンパス | この発表では、博士課程の学生を対象に、研究方法論、学位論文の研究計画、研究倫理委員会の承認プロセス、学位論文の執筆について指導を行った。私自身の研究の方法論に焦点を当てながら、論文執筆のコツやアドバイスも伝えた。また、研究倫理委員会の審査を受けようとする学生のために書いた、申請のガイドについても説明した。 |
| 2.Using student-created class vocabulary lists | 共 | 2020年11月17日 | The 8th Annual JALT Vocabulary SIG Vocabulary and CALL Symposium (ONLINE) | G. Clint Denison and Imogen Custance.　クラス用語彙リスト（CVL）の教育的基礎と、Google Sheetsを用いたその実装について説明する。CVLは、学生が共同で、学ぶべき重要な語彙の「ノートブック」を構築することを可能にする。学生（N = 53）が選択したCVLを、頻度ベースのリスト（BNC/COCA、NGSL、TSL）と比較し、選択した語彙の有用性を判断した。情報工学のキーワードリストを作成し、情報工学のCVLと比較することで、学生が現場に適した語彙を選択しているかどうかを判断した。その結果、学生に語彙を選ぶ自主性を与えた場合、一般的に文脈に合った有用な単語を選び、CVLは頻度ベースのリストを有益な方法で補完することが分かった。 |
| ２．学会発表 | | | | |
| 1.A longitudinal investigation of communicative performance in EFL writing using many-facet Rasch measurement | 単 | 2025年3月24日 | Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics（コロラド州デンバー、USA） | L2研究では、言語的要素（複雑性[complexity]、語彙[lexis]、正確性[accuracy]、流暢さ[fluency]）が重視されるが、近年、機能的適切性や語彙の適切性を含むコミュニケーション的要素の評価も重要視されている。しかし、これらの発達過程を検討した縦断研究は少ない。本研究では、日本の大学生250名のEFLライティングを1年間追跡し、775の作文をContent, Comprehensibility, Organization, Task Completion, Lexical Appropriatenessの観点から評価した。Many-Facet Rasch Measurement分析の結果、全指標において直線的および非線形的向上が見られたが、発達の程度や進行は異なった。特にLexical Appropriatenessの向上が顕著であり、Task Completionの発達は大学の文脈に依存していた。本研究は、L2パフォーマンス研究において、コミュニケーション的要素の測定を区別する重要性を示唆する。 |
| 2.A procedure for linking longitudinal many-facet data | 単 | 2024年11月16日 | JALT（全国語学教育学会）50th Annual International Conference（静岡県静岡市） | 多面的評価を伴うテスト（受験者、トピック、評価者、評価基準など）は一般的であり、多面ラッシュ測定（Many-Facet Rasch Measurement; Linacre, 1994）はその分析に適している。しかし、学習者の能力が時間とともに変化する縦断的状況では、他の要因の変動が学習者の発達を不明瞭にする可能性がある。本実践的ワークショップでは、学習者の発達を正確に検討できるようにしつつ、縦断的多面データを統合する5段階の手法を説明する。 |
| 3.A longitudinal analysis of L2 written communicative performance using many-facet Rasch | 単 | 2024年2月3日 | 25th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テン | 第二言語（L2）のproductionに関する研究では、性能はcomplexity、accuracy、fluency、およびlexisの観点から見られる。このフレームワークが有用であることが示されているが、コミュニケーションの側面も言語のパフォーマンスの記述に考慮するべきだとする共通の認識が広がっている。ただし、パフォーマンスのコミュニケーションの側面がどのように発展するかについてはほ |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ２．学会発表 | | | | |
| measurement | | | プル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | とんど知られていない。本研究では、4つのargumentative writingタスクがバランスよく配置され、4つの日本の大学のEFLコースの270人の学生に実施され、学年を通じて4つの波の長期データが得られました。評価者チームが775の回答のcontent、comprehensibility、organization、task completion、およびlexical appropriatenessを評価した。Writingが時間とともにどのように変化したかを判断するために、many-facet Rasch analysisを使用して分析されました。結果は、すべての尺度が成長を示しており、発展が異なることがわかった。今後の研究への示唆についても議論する。 |
| 4.A longitudinal investigation of lexical development in EFL learners' argumentative writing | 単 | 2023年4月23日 | Back to School 2023 - Osaka JALT's 13th annual spring conference（大阪女学院大学・短期大学，大阪市） | このポスターは、2023年3月18日にオレゴン州ポートランドで開催された米国応用言語学協会（AAAL）の年次大会でも発表されました。 |
| 5.The influence of typed vs. handwritten task modality on writing fluency development in EFL learners | 共 | 2023年3月20日 | Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics（オレゴン州ポートランド、USA） | Imogen Custance and G. Clint Denison. 手書きやタイピングなど、ライティングのモダリティがアウトプットに与える影響についてはいくつかの研究がありますが、モダリティが流暢さの発達速度に与える影響や、EFL学習者のライティング流暢さ向上のための適切な目標について検討した研究はあまりありません。そこで、EFLコースにおけるライティング・フルエンシー活動の実施に関する教育学的判断に役立てるため、タスクのモダリティの影響について調査しました。その結果、手書きの学生（n = 60）はタイピングの学生（n = 55）よりも常に平均して多くの単語を生成していたが、トピックとライティングの自己効力感の影響をコントロールした結果、タイピングの学生の方がより早く流暢さを向上させた。これらの知見とモダリティの理解を深めることで、EFL教室でのライティング指導において、より現実的で目に見える流暢さの目標がどのように示されるかを考察する。 |
| 6.A longitudinal investigation of lexical development in EFL learners' argumentative writing | 単 | 2023年3月18日 | Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics（オレゴン州ポートランド、USA） | （ポスター発表）L2英語学習者のライティングを評価する上で、語彙的な生産量の測定が有用なツールであることはよく知られている。語彙の測定は、学習者がどの程度ライティング課題をこなしたかを知るための洞察と、パフォーマンスを追跡する手段を提供します。語彙の測定とそれぞれの発達の軌跡を詳細に理解することは、教師が学習者のライティングを評価し、改善と後退を追跡し、目標とする指導の恩恵を受けそうな領域を発見するのに役立つ。しかし、単一単語と複数単語の語彙を縦断的に調査した研究はほとんどなく、発達のパターンに関する知識も限られています。本研究の目的は、このような知識のギャップを解消し、EFLライティングの目標に関する教育的判断に役立てるとともに、評価のアプローチを改善することにある。 |
| 7.Measuring vocabulary development using a Rasch analysis of linked tests | 単 | 2023年2月4日 | 24th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | 語彙力が時間の経過とともにどのように変化するかを理解することは、研究者と実践者の両方にとって興味深いものである。学習者の語彙力の向上（および後退）は、教育方法の相対的な影響や学習者の言語発展についての洞察を提供できる。したがって、いくつかの語彙のサイズやレベルのテストが開発されている。これらのテストは変化を調査するためにpretest-posttestのデザインで使用できる。しかし、同一のテストを異なる実施で使用することは、内部妥当性に対するtesting threatを導入する可能性があります（Trochim et al., 2016）。このtesting threatを緩和する代替手段として、共通のアイテムを使用して異なるテストをリンクするという手法がある。本発表では、共通のアイテムを使用してリンクされた2つのproductive（form-recall）語彙テストに対するRasch解析を行い、VocabLevelTest.org（McLean&Raine、2019）を使用して、日本の4つの大学のEFL学生（n = 230）に対して1学年を通じて語彙力の変化の調査を行った。 |
| 8.The longitudinal | 単 | 2022年11月 | JALT（全国語学教 | 語彙の測定はL2英語学習者のライティングを評価するための有用な |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ２．学会発表 | | | | |
| development of single- and multi-word units in L2 writing | | 13日 | 育学会）48th Annual International Conference（福岡県福岡市） | ツールであるが、発達の軌跡はよく理解されていない。本研究では、この知識ギャップを解消するために、297名の大学生を対象に、1年間に4回、回答文を調査した。回答は分析され、複数の単一単語および複数単語の産出量の測定値が得られ、それらを一連のlinear mixed-effects分析にかけることで、語彙の発達がどのように起こったかを明らかにしました。教育および評価への影響について議論する。 |
| 9. Longitudinal lexical development in EFL writing | 単 | 2022年10月29日 | JALT Vocab SIG 2022 Symposium（東京国際大学、埼玉県川越市） | （ポスター発表）プロダクションの語彙的測定は、L2英語学習者のライティングを評価するための有用なツールであることが研究によって示されている。それらは、L2ライティングの習熟度を示すと同時に（e.g., Garner et al., 2019; Ishikawa, 2015; Kim & Crossley, 2018; Laufer, 1994; Laufer & Nation, 1995; Mazgutova & Kormos, 2015）、パフォーマンスを追跡する手段を提供できる（Lafer, 1994; Siyanova-Chanturia, 2015）. 語彙の指標とそれぞれの発達の軌跡を詳細に理解することは、教師が学習者のライティングを評価し、改善と後退を追跡し、的を絞った指導の恩恵を受けそうな領域を発見するのに役立つでしょう。しかし、単一単語と複数単語の語彙尺度を縦断的に調査した研究はほとんどなく、発達パターンに関する知識も限られています。本研究の目的は、このような知識のギャップを解消し、EFLライティングの目標に関する教育的判断に役立てるとともに、評価のアプローチを改善することにある。 |
| 10. Pen or keyboard? The impact of task modality on writing fluency development | 共 | 2021年11月14日 | JALT 47th Annual International Conference (ONLINE) | Imogen Custance, Myles Grogan and G. Clint Denison. EFLコースにおけるライティングのフルエンシー向上の目標とモダリティの選択に関する教育学的な決定に役立てるため、ライティングタスクのモダリティについて調査した。科学技術学部の学生を対象に、1学期に10回の流暢なライティングのトリートメントを実施した。学生は、トピックの順番をランダムに割り当てられ、手書き（n = 60）またはタイプ（n = 55）という単一のモダリティで、全コースのトリートメントを完了しました。マルチレベル・リニア・モデリングにより、手書きとタイピングがどの程度成長率に影響を与えるかを検討した。その結果、手書きの学生はタイピングの学生よりも平均して多くの単語を書きましたが、英語力とライティングの自己効力感の初期差をコントロールすると、タイピングの学生の方がより速い速度で上達することが分かりました。教室でのライティング・フルエンシー練習における手書きとタイピングの相対的な利点について議論する。 |
| 11. Measuring L2 listening self-efficacy: A mixed-methods validation study | 共 | 2020年3月28日 (Conference cancelled) | Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics（コロラド州、デンバー、USA） | Brandon Kramer & G. Clint Denison. 本発表では、L2リスニングタスクに対する学生の自己効力感を測定するための16項目の調査について、混合法による検証を行った。Messick（1995）のConstruct Validity Criteriaをフレームワークとして、調査データ（N = 185）のRaschベースの定量分析と、学生の回答源を明らかにするための半構造化質的インタビュー（N = 6）が行われた。定量的な結果から、項目は十分な難易度の広がりを持ち、確率的にRaschモデルに適合し、基本的に一次元の構成要素を形成していることが示された。また、質的な結果から、この測定器は意図した構成要素を的確に捉え、L2リスニングの自己効力感の主要な原因を明らかにするものであることが示唆された。 |
| 12. Vocabulary development and instruction using student-created lists | 単 | 2019年5月11日 | 9th Annual Osaka JALT Back to School Conference（大阪女学院大学、大阪府大阪市） | このポスターは、2019年3月11日にジョージア州アトランタで開催された米国応用言語学協会（AAAL）の年次大会でも発表されました。 |
| 13. Vocabulary development and instruction using student-created lists | 単 | 2019年3月11日 | Annual Conference of the American Association for Applied | 本ポスター発表では、現在の語彙研究が示唆する、学生が作成するクラス用語彙リストの有益性や必要性について述べるとともに、NGSLやNAWLなど自由に利用できる頻度ベースのリストと統合して作成するための実践的アプローチについて説明した。また、1学年を通じて学生が作成したクラス用語彙リストを調査したパイロット研究 |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ２．学会発表 | | | | |
| | | | Linguistics（ジョージア州アトランタ、USA） | の結果、効果的な活動、評価、学生による単語選択のパターンなどについて説明しました。 |
| 14.Measuring adequacy in L2 production | 単 | 2019年2月3日 | 21st Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | L2パフォーマンスの客観的測定尺度（複雑さ、正確さ、流暢さ、語彙など）は確立されているが、コミュニケーション的・機能的妥当性などの健全な主観的測定尺度の開発も無視してはならない。私は、Many-Facet Rasch分析を用いた新しい適切性尺度の開発と検証について論じた。 |
| 15.Vocabulary development using student-created lists | 単 | 2018年11月24日 | JALT 44th Annual International Conference（静岡コンベンションアーツセンター、静岡県静岡市） | 研究者たちは、言語プログラムにおいて明示的な語彙学習を取り入れるべきであると主張してきた。これはいくつかの方法で実現できますが、深い学びを促すために学習者の語彙への関与を高めることは、指導者にとって難しいことです（Schmitt, 2008）。その解決策の一つが、学生が作成するクラスリストであり、これにより学習者の自律性を促進し、語彙への関与を高めることができます。本発表では、コンピュータで共有するクラス用語彙リストの作成方法と、学習者の語彙力向上を促進するための活用方法を紹介しました。 |
| 16.Examining the lexical profile and speaking skills of English L2 learners | 単 | 2018年5月12日 | 8th Annual Osaka JALT Back to School Conference（大阪女学院大学、大阪府大阪市） | この発表では、ディスカッションコースで実施されたスピーキングテストにおけるEFL大学生の語彙プロフィールとフレーズの使用状況を調査したパイロット研究について述べる。このコースは、NAWL単語や定型文の明示的な学習と指導を通じて、学習者の語彙力とスピーキング力を向上させることを目的としていました。結果は、すでに非常に熟達したスピーカーの学習者であっても、このプログラムは部分的に有効であったことを示唆するものであった。 |
| 17.The effect of oral explicit corrective feedback on fluency within an interaction | 単 | 2018年2月4日 | 20th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | タスクの研究には、プロダクションの複雑さ、正確さ、流暢さ（CAF）を検討する研究が豊富にある。また、いくつかの研究では、修正フィードバック（CF）がCAFに及ぼす影響についても検討されています。しかし、従来の研究では、学習者のプロダクションのCAF測定は、単調な物語、意見、相互作用のない指導的なタスクで評価されてきました。CFとCAFの発達の関係は研究されているが、CFが相互作用の中でCAFに及ぼす影響を検討する研究についてはギャップがある。本発表では、タスクパフォーマンスとCFの研究領域を橋渡しすることを目的として、即時口頭明示的修正フィードバックがインタラクション内の流暢性に及ぼす影響を調査する研究の提案について述べる。 |
| 18.Bringing computer literacy development into language instruction | 単 | 2017年6月3日 | First Annual Japan Center for Michigan Universities Symposium（ミシガン州立大学連合日本センター、滋賀県彦根市） | 多くの教師は、「デジタルネイティブ」である学生の多くが、実は高度なコンピューターリテラシーを持っていないことに驚いています。ほとんど日常的に現代のテクノロジーを使っているにもかかわらず、コンピュータ技術の基本を理解し、高度な問題解決に効率的にコンピュータを使う能力がないのです。しかし、このことは、コンピュータの知識がある、ITのバックグラウンドがある、あるいはコンピュータを実践的な文脈で語学教室に導入したいという願望を持つ語学教師にとって、ユニークな教育機会をもたらすものである。学習者の言語能力、コンピュータを使った実践的なスキル、コンピュータリテラシーを同時に伸ばすために活用できる、共同プロジェクトやタスクベースの学習活動について説明する。 |
| 19.Kiva in the classroom | 共 | 2017年5月27日 | 7th Annual Osaka JALT Back to School Conference（大阪女学院大学、大阪府大阪市） | Imogen Custance & G. Clint Denison.　グローバルな問題に対する意識を高めながら、学生のモチベーションを高める方法を見つけることは、今日のグローバル社会においてますます重要となっています。この発表では、マイクロファイナンス組織を授業に活用することで、学生にグローバルレベルでの社会貢献の意識を持たせ、同時に言語発達をサポートする様々な方法を検討します。 |
| 20.Accurately measuring L2 listening self- | 共 | 2016年11月27日 | JALT 42nd Annual International Conference（愛知 | Brandon Kramer & G. Clint Denison.　この発表では、第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを測るアンケート調査のMixed－Methods　Validationについて論じる。定量分析の結果では、アン |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ２．学会発表 | | | | |
| efficacy | | | 県名古屋市） | ケート調査を正確に測定することができ、予想通りに第二言語に対する不安や学習能力との関係を示した。定性分析の結果には、日本の大学生の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーの原因となるものを強調した。このアンケート調査は日本の大学生の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを正確に測ることに加えて、将来の実績を予想すると考えられる。 |
| 21.Principled topics for developing writing fluency | 単 | 2016年11月26日 | JALT 42nd Annual International Conference（愛知県名古屋市） | 試験においても、現実社会においても、第二言語学習者は速く、流暢に様々なトピックについて書く必要がある。しかしながら、今までにライティング活動で使われてきたトピックや、そのトピックとフルエンシーの関係についての研究が足りていないように考えられる。この研究では、どのトピックがライティング・フルエンシーにつながっているのかについて調べた。研究に基づき、どのトピックが評判がよく、書きやすく、文法的に多様性があるという問題について論じる。 |
| 22.Developing learners' L2 writing fluency | 単 | 2016年4月23日 | 6th Annual Osaka JALT Back to School Conference（大阪女学院大学、大阪府大阪市） | 時間制限などのプレッシャーがある中で自分のライティンの流暢性を向上させることが難しいと思う学習者が多数いる。しかし、幸運にもスピード・ライティングとトピックを上手く組み合わせればライティング・フルエンシーを向上させることができる。この発表では、スピード・ライティングのプログラムをどのように授業に取り入れれば良いかや、適切な教材について論じる。 |
| 23.Listening self-efficacy for Japanese students: A Rasch-based instrument validation | 共 | 2016年2月7日 | 18th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス東京センター、東京都南麻布） | Brandon Kramer & G. Clint Denison. この発表では、学生（N=185）の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを測るアンケート調査（16 item）のRasch Validationについて論じる。結果には、アイテムの困難さの度合いがよく、確率的にRash Modelの条件に合致し、Unidimensional Constructにもなった。このアンケート調査は学習者の第二言語のリスニング・セルフ・エフィカシーを精密に測ることに加えて、将来の実績を予想するかもしれない。 |
| 24.Specifications for a vocabulary achievement test | 単 | 2016年2月7日 | 18th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス東京センター、東京都南麻布） | この発表では、語彙テストを作成するためのアイテム・スペシフィケーションを三つ紹介し、提供する。このアイテム・スペシフィケーションを基に作成して、行った語彙テストの結果についても論じる。結果として、この語彙テストは他のテスト（e.g.、TOEIC、期末テスト)と相互関係を示し、語彙能力を測るのに役立ったと考えられる。 |
| 25.Comparing Two Secondary School ER Programs | 共 | 2015年11月22日 | Extensive Reading Colloquium, JALT 41st Annual International Conference （静岡コンベンションアーツセンター、静岡県静岡市） | G. Clint Denison & Imogen Custance. この発表では、二つの高校においての多読（ER）プログラムについて論じる。一方では必要な語数が決められており、学生が沢山読まなければならない。もう一方では学生が自分のペースで読んで構わないとした。この二つのプログラムを比較すると英語に対する学習意欲が高く、必要な単語数が決められていなくても沢山読む学生がいるとはいえ、相対的に単語数が決められていたプログラムの学生の方が沢山の単語を読んでいるということがわかる。その上、単語数の設定がきっかけになり、ERや読書を積極的に取り組むようになることもある。 |
| 26.Narratives topics to develop writing fluency | 単 | 2015年5月16日 | 14th JALT PanSIG Conference（神戸市外国語大学、兵庫県神戸市） | 時間制限などのプレッシャーがある中で自分のライティンの流暢性を向上させることが難しいと思う学習者が多数いる。そのため、授業でライティング・フルエンシーを発達させる必要があると考える。ナラティブ・トピックとスピード・ライティングの組み合わせによって学生が教師とコミュニケーションをとる機会が増え、ライティング・フルエンシーを向上させることができる。この発表では、一年間を通して高校の授業で活用したスピード・ライティング活動とその活動で用いたトピックについて論じる。また、結果として流暢性の向上（WPM）が見られた。 |
| 27.Conjunction-based | 単 | 2015年02月 | 17th Annual | 外国語としての英語教育を数年間受けていても、複雑な文章が書け |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| ２．学会発表 | | | | |
| sentence combining to develop complexity in fluent writing | | 08日 | Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | ない学習者が多く存在し、さらに早く書こうとする際に短い文章や同じ文章を何度も繰り返すことで複雑な文章が書けていないという状況がある。この研究ではライティングの複雑性を増すセンテンス・コンバイニングという活動について調べた。高校1年のスーパーイングリッシュコース(N=53)の授業でセンテンス・コンバイニングの練習問題を順にやり、その結果対象者のライティングの複雑性（MLS、CPS）が上がった。その上、ライティングの速度（フルエンシー）にも微増が見られ、その研究結果やセンテンス・コンバイニングの練習問題について論じる。 |
| 28.Fluency development through extensive writing | 単 | 2014年2月9日 | 16th Annual Temple University Applied Linguistics Colloquium（テンプル大学日本キャンパス大阪センター、大阪府大阪市） | この発表では、中学校3年のスーパーイングリッシュコース(N=78)に取り組んだエクステンシブ・ライティング（多書）という活動について論じる。学生が自分のライティングの正確さに集中し過ぎ、長文が書けないという問題は珍しくない。その問題が解決できるようにエクステンシブ・ライティングを授業に導入した。学生がトピックを選び、7分間できるだけ速く長く書き続け、終わったら自分のチャートに記録し流暢性（フルエンシー）を向上するように試みた。研究の結果として、学生のライティング速度が徐々に上がったのを見られた。その上、エクステンシブ・ライティングがライティング・フルエンシーの向上やライティングに対する取り組み易さの向上には効率的な活動の一つであるかもしれない。 |
| 29.英語活動ってどういうの（Do you know)? | 共 | 2008年10月17日 | 文部科学省指定小学校国際理解教育研究発表会シンポジウム（篠山市立岡野小学校、兵庫県篠山市） | 吉田達弘、藤田聖子、G. Clint Denison、 石田靖、＆ 安井健二. 小学校で「外国語活動」が必修科目になり、初めて英語を教える小学校の先生が増えている。生徒が英語が好きになるように、どのように先生が英語を教えればよいかという問題について考える。 |
| ３．総説 | | | | |
| 1.Recent research in extensive reading | 共 | 2019年10月 | Extensive Reading in Japan, 12(2). 24-27. | Imogen Custance and G. Clint Denison. エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 2.Recent research in extensive reading and listening | 共 | 2018年11月 | Extensive Reading in Japan, 11(2). 25-27. | Imogen Custance and G. Clint Denison. エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 3.Recent research in extensive reading and listening | 共 | 2018年7月 | Extensive Reading in Japan, 11(1), 21-24. | Imogen Custance and G. Clint Denison. エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 4.Recent research in extensive reading | 単 | 2017年11月 | Extensive Reading in Japan, 10(2), 24-27. | エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 5.Recent research in extensive reading and listening | 単 | 2017年05月 | Extensive Reading in Japan, 10(1), 20-23. | エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 6.Recent research in extensive reading and listening | 単 | 2016年09月 | Extensive Reading in Japan, 9(2), 22-25. | エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| 7.Recent research in extensive reading | 単 | 2016年06月 | Extensive Reading in Japan, 9(1), 20-23. | エクステンシブリーディング（多読）とエクステンシブリスニング（多聞）に関連するトピックおよび最新の研究のレビュー。 |
| ４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績 | | | | |
| | | | | |
| ５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等 | | | | |
| 1.mwu.jpを通して自主 | 単 | 2018年7月 | 武庫川女子大学・ | この記事では、ぐーグル・クラスルームを活用した語彙学習へのア |

| 研究業績等に関する事項 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 著書、学術論文等の名称 | 単著・共著書別 | 発行又は発表の年月 | 発行所、発表雑誌等又は学会等の名称 | 概要 |
| **５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等** | | | | |
| 的な語彙学習 | | | 同短期大学共通教育ニュース、Vol. 10、No.1 | プローチを紹介する。学生は共有スプレッドシートにアクセスし、クラスリストを作成するために自分で単語を選択し、リストに追加する。このリストは、自律学習を促進するために活動やクイズでの使用ができる。 |
| 2.Vocab@Tokyo: Current trends in vocabulary studies | 共 | 2016年9月 | Meiji Gakuin University and the JALT Vocabulary SIG | 編著 Brandon Kramer, Imogen Custance, Clint Denison, & Steve Porritt. 2016年9月12日から14日にかけて明治学院大学で開催されたカンファレンス「Vocab@Tokyo」のガイドブックです。重要な学会情報に加え、学会で議論されたプレゼンテーションan論文の拡張アブストラクトを多数収録しており、語彙の学習・指導を研究する上で貴重な資料となるガイドブックとなった。 |
| 3.Activities for teaching pronunciation to Japanese learners of English | 共 | 2016年4月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 105. | 編著 G. Clint Denison, Nicole Furuya, Samuel Sorenson, & Eddy Tang. この論文集では、英語を勉強する日本人のための発音練習のオリジナル教材や活動のアイデアを提供する。英語のセグメンタルやスプラセグメンタル特徴の練習ができる活動も含まれている。日本人や日本の学校のために作られた教材であるが、様々な状況に応じて活用できると考えられる。 |
| 4.Individual differences in second language acquisition | 共 | 2014年8月 | Temple University Japan Studies in Applied Linguistics, 94. | 編著 Natalie Barbieri, Kate St. Hilaire, & G. Clint Denison. この論文集では、多様な文化的背景と言語習得のレベルの異なる学習者に対し、教師が活用できる様々なアイデアや活動を提供している。学習者の違い（Individual Differences）として、モチベーション、アイデンティティー、セルフ・コンセプト、第二言語への不安、学習スタイル、他者と対話する意思、性別等についての研究を紹介する。 |
| 5.インタビューを通して英語への興味を深める | 単 | 2009年11月 | 兵庫教育、第61巻、第 8号、46-49頁 | この論文では、英語能力を鍛えながら英語に対しての興味を深める、小学校で活用できる様々なインタビュー活動を紹介する。初めて英語を教える小学校の先生を対象とし、使いやすく、変更しやすいレッスンプランを提供する。 |
| **６．研究費の取得状況** | | | | |
| 1.英語教授法（TEFL）取得支援補助金 | 単 | 2012年1月 | 自治体国際化協会（CLAIR・クレア） | TEFL（外国語としての英語教授法）資格取得コース修了を目的に、自治体国際化協会（CLAIR）の競争的資金を取得した。 |

| 学会及び社会における活動等 | |
|---|---|
| 年月日 | 事項 |
| 1.2018年12月～現在 | American Association for Applied Linguistics（米国応用言語学会） |
| 2.2018年3月～現在 | Japan Association for Language Teaching - Testing & Evaluation SIG |
| 3.2013年12月～2020年9月 | Japan Association for Language Teaching - Extensive Reading SIG |
| 4.2013年12月～現在 | Japan Association for Language Teaching - Vocabulary SIG |
| 5.2013年12月～現在 | Japan Association for Language Teaching（全国語学教育学会） |
| 6.2013年12月～2015年12月 | Japan Association for Language Teaching - Computer Assisted Language Learning SIG |